

石油ストーブがシュウシュウとヤカンを沸かす、Tシヤツ一枚でも過ごせそうな部屋で、温まったマグカップを差し出された。

「亜美ちゃん、牛乳好きだったべ。昔、遠足で牧場ば行つたしょ。そんなとき、牛乳好きだって……牛肉だったべか？」

マグカップから伝わるぬくぬくした熱が、凍っていた私の指先と、頭の片隅を溶かす。

「あ」

小学生から中学生あたりの頃、女子から人気のある男子というのは、軒並み足が速いのだった。足が速いだけではない、運動が得意なのである。

そしてなぜか、勉強のできる、できないは人気にあまり関係ないのだった。稀に「頭良いからカッコイイ！」と言われる男子もいたが、その場合、彼は頭脳のみでカッコイイと思われているわけではなく、運動が得意であること、または顔立ちが整っていることが前提となっていた。

そのどちらももっておらず、頭が良い男子は、なぜかモテなかった。そこそこ運動ができ、そこそこ顔立ちが

整っており、期末テストは下から数えると早い男子よりもモテなかった。加えて、子どもというのは幼いほど、運動ができない子を容赦なく侮り、邪険に扱い、馬鹿にするのだった。

北海道から群馬に引っ越してきた私の幼馴染は、まさしくこの例通りの男子だった。

「勇人めっちゃ頭良くない？ うらやましんだけどー」  
「今度英語教えて、マジで」

と、当時一番やかましく、一番ブイブイ言わせていたグループの女子達にキヤーカー言われていた、期末テスト学年九位の勇人くん。の、二つ後ろの席で黙々と間違えた箇所を赤ペンで直していた、学年一位。運動会の徒競走はいつもビリだった。彼が私の幼馴染、陸くんである。

陸くんが北海道から私の実家の隣に越してきたのは、確か小二のとき。すでに陸くんには北海道弁が染みついており、まだ常識もデリカシーもない小学生達は残酷にも方言を馬鹿にして笑うのだった。群馬にも方言はあるのだが。

皆、まだ地理も地域に対する認識もあやふやで、とにかく北海道全土が牧場だと思っていた（これについては私もそう思っていた）ので、陸くんを田舎者扱いし、これまた馬鹿にする。「自販機初めて見るべ？」と。

後で分かったことだが、陸くんは札幌市から来ていた。

札幌市は当時から今に至るまでずっと、私達の小学校、中学校がある市よりかなり都会である。

陸くんは背が学年で一番高く、肩幅が広がったのだが、前述したように運動が苦手だった。からかわれても、悲しいのか怒っているのか、はたまた何も感じていないのか分からない顔をしていた。肌が雪のように白く、髪が墨のように黒いのもあって、ついたあだ名は「牛」。

このあだ名は定着し始めてすぐ、当時の担任の先生がやめさせたが、中学校に上がった後も陰でそう呼ばれていた。普通、中学生ともなればそんな馬鹿馬鹿しいからかいはやめるものだが、私達は小学校から中学校まで、ほぼ同じメンバーなので、いつまでも大昔のネタを擦って揶揄するノリがウケてしまう、悪しき習慣が根づいていた。

結果、陸くんは小二から中三まで、ずっと「牛」と呼ばれ、徒競走でビリになっては馬鹿にされ続けた。

私はそんな陸くんを馬鹿にしなかった。最初は、正義感とか、優しさゆえではなかったと思う。ただ、親戚が北海道にいたので北海道弁には慣れていて、陸くんを馬鹿にする気は起こらなかったのだ。近所付き合いもそこそこあり、陸くんとその両親は良い人達だった。

かといって助けることもしなかった。近所なので互いに休んだときは学校の配布物を渡しにいったり、登下校

で偶然一緒になったりしたのだが、それが少し嫌だったからである。

私はクラスメイトから露骨にからかわれることはなかったが、「陸くんと仲良いの?」「陸くんとこの前一緒に帰ってなかった?」と好奇の目で聞かれることが多々あった。陸くんは良い人だが、これ以上彼との接点が増えろとあらぬ誤解を受け、私まで馬鹿にされかねないと内心冷や汗をかいた。また、実は当時の私は、勇人くんの金魚のフンの存在でやはり足の速かった颯真くんが好きだったので、「陸くんとイイ感じらしいよ」なんて噂が本格的に流れ出したら一巻の終わりだとも思っていた。そのため、私は「ううん、先生から頼まれただけ」「あの人のことはよく知らない」と返していた。

私もからかっていじめていた連中と同じく、悪である。そのポジションにいて保身に走っていたのだから、けれど、陸くんは私を友達だと思ってくれていたらしく、北海道の私立男子校に進学するために群馬を去る日の朝、私に住所を書いたメモを手渡ししてくれた。

「向こうさ行つても、忘れんでくれ。ここに年賀状を送ってけれな」

私は玄関でそれを受け取りつつ、「なんで?」と思った。これも残酷である。素直に、こちらこそ親しく思ってくれてありがとう、何もできなくて申し訳なかったと感じるべきところを。

私は毎年、申し訳程度の年賀状をその住所に出していた。今の時代、年賀状なんて大学の一番仲の良い友達とであってもやりとりせず、スマホで「あけおめ」の四文字で済ませるのが普通だろう……そう思いながら、コンビニで買った年賀状にその住所だけ書いてポストに入れていた。

陸くんは律儀に、写真や手書きの文字を入れた年賀状を返してくれていた。今年は、飼ってる黒い犬の写真と共に「あけましておめでとう！ この前、やつと車の免許とれたよ」と書かれていた。去年の年賀状に免許をとろうと思っているみたいなのが書かれていたので、彼は免許取得にほぼ一年かかったらしい。犬は大きくなっていた。

いじめられた側はされたことを覚えているが、いじめた側は、いじめたことすら覚えていないという話をよく聞く。

先日の同窓会で、私はそれを痛感した。

その同窓会は、勇人くんが幹事として、連絡がつく同級生達に声をかけたと聞いていた。聞いたこともない、アクセスの悪い辺鄙な居酒屋で行われると知って、行くか迷ったが、勇人くんが来るということは颯真くんも来るのでは……と思いついて、参加することにした。

今も颯真くんに対する気持ちを引きずっていたわけ

はなかった。けれど、東京の私大に進学して二年経っても彼氏ができなかった私は、この同窓会に多少邪な願望を抱いてもいたのだ。

しかし、会場の店に着いてわりとすぐ、その願望は砕け散った。颯真くんは来た。しかし彼は、同窓会が始まるや否や昨夜打ったパチンコの話をし、その場にいない同級生との痴情のもつれ話で笑いをとるどうしようもない奴になっていた。

颯真くんは、こんな奴だっただろうか。私は向かいで胡坐をかく彼の耳に開いたピアスを見つめながら思った。中三の合唱コンクールでピアノを弾いた私は、本番で最初の音を間違えて、その後パニックになって何度もミスをした。音楽の先生に金賞を狙える時までお墨付きを貰っていた私のクラスは銅賞にも届かず、女子の何人かが遠回しに私を責めた。そのときに「亜美ちゃんのせいじゃねーって！」とかばってくれた颯真くん。

「めっちゃ胸盛ってたわ！」

これが、あの颯真くんだろうか。彼に限ったことではなく、私達の年頃の男というのは、こういうものなのかもしれない。私は男性とあまり関わりがないので本当のところは分からないが、きつと特段、珍しいことではない。こういう話でカッコつけたいとか、盛り上がりたいたい年頃なのだ。

しかし、悲しいものは悲しい。

彼の話す、その場にはない同級生の女子は、良くも悪くも友達を優先する子だった。私とは特に仲が良いわけではなかったが、廊下ですれ違ふと必ず「おはよう」と言ってくれたことを思い出した。

「なんか気まずくなつて、その後既読無視してただけだよ！」

このどうしようもなさはダサすぎる。今、二十歳か二十一歳の彼は、十五歳の頃の彼にカッコよさで惨敗している。

が、そこで皆に合わせて笑う私も私で、どうしようもないのである。始終、話題に昇るのはパチンコと、どこでどう仕入れたのか不気味に思うほどつぶさな、その場にはない他人の情報だった。

話を聞いているうちに、どうもこの同窓会は勇人くと颯真くん、彼らと仲の良い南ちゃんの三人が呼びたいと思つた人へのみ声をかけていたことが分かった。逆に言えば、彼らが気に食わないと思つた同級生は、同窓会があること自体知らされていないのである。

それを、同窓会とは呼ばない。

私は冷めきつた唐揚げの残り一つをさらいながら、この会に呼ばれた上に、邪な期待を抱いたことを屈辱に思つていた。

「そういえば、亜美ちゃんって東京の〇〇大に行つてる

んだよね？ 佳奈ちゃんと同じでしょ？」

なんで知つてるんだらう。

「ああ、うん」

「佳奈ちゃんって前に正樹先輩と付き合つてたけど別れたじゃん。今誰かと付き合つてんの？」

「あー……どうなんだろう。佳奈ちゃんとは学部違ふから、最近会つてなくて。よく知らないんだ」

正樹先輩というのは、確か中学の先輩だ。佳奈ちゃんが彼と付き合つていたことを、私はそもそも知らなかったが、今、彼女が同じサークルの後輩と付き合つていることは知つていた。

この会は二月にあつたので、帰省中の群馬にはずっと雪が降つていた。その雪で思い出されたのか、同窓会が始まつて二時間。皆、酔いが回つてきた頃に勇人くんが言つた。

「あー、なんか北海道に行った奴いたよな。牛くんつての」

私の背中に、どつと冷や汗が湧き出た。

「いたねえ、うわー懐かしい！ 牛くんの本名つてなんだったけ」

「忘れたわ！ ずっとその呼び名だったし」

「テストできたから先生の評判は良かったけどさ、悪い意味で目立つてたつていうか……けっこうヤバかったよ

ね」

「うわこいつエグ！ エグいこと言うやん」

悪い意味で懐かしい。陸くん、よくこういうこと言われてたな。そう思ったとき、ふと、陸くんが北海道の高校に行ったのは、その高校が進学校だったからというのだけが理由なのではないのかもしれないと気づいた。

「てかマジでなんだっけ本名」

すると、颯真くんが言った。

「こういうときは、ね。亜美ちゃんでしょ」

「え、え？」

「仲良かったじゃん」

「……あー……」

返答に詰まっていると、

「牛くんって名前も、亜美ちゃんが名付け親っしょ」

誰かが言った。

私は、思い出せなかった。

背が学年で一番高く、肩幅が広がったのだが、運動が苦手だった。からかわれても、悲しいのか怒っているのか、はたまた何も感じていないのか分からない顔をしていた。肌が雪のように白く、髪が墨のように黒いのもあって、ついたあだ名は「牛」。

そのあだ名がいつ、どこでつけられたものだったか。

でも、「名付け親っしょ」と言われた瞬間、心臓を掴ま

れたような感覚があった。悪いことをしているとき、「あ！」と誰かに指をさされたときの感覚。

思い出せないくせに、私が「名付け親」だという確信だけはあった。

息ができなくなった。肺に残っていた空気を絞り出して言った。

「陸くん。名前は陸くん」

新潟から乗る北海道行きフェリーは、冬場、特に揺れる。酔い止めを予め飲んだけれど、今、視界が回っているのだぶんちよつと酔っている。

両親が最初「夏に行ったほうがいい」と言った理由の一つはこれだったか、と気づいたけれど、やっぱりこの冬に行くべきだと思った。

この春休み中に、できるだけ早く北海道に行きたい。三日前、あの飲み会から帰ってすぐそう言った私に、両親は驚いた。でも、わけを話したら、お父さんは眉間に皺を寄せてただ一言、「明日明後日は大雪だから、待ちなさい」と言った。

お母さんは混乱して何度も私にわけを話させたけれど、今朝、家を出る私に、「あんた、本当にちゃんとしなさいよ」と溜め息混じりに言っていたから、なんとなく分かってくれたようだった。

甲板から見下ろす海は真つ黒で、波が蠢かせる月明かりの艶だけが白かった。書写の時間、教室に漂っていた匂いを思い出す。

「亜美ちゃん、なした？ 墨汁か。したら貸してやる。なんも気にすることね、この前だっけ亜美ちゃんに消しゴム貸してもらったしょ」

こういうことは、一度か二度ではなかった。どうして今になって、思い出すのか。

室内の放送が漏れ聞こえてくる。そろそろ消灯時間だ。明日は朝四時に小樽に着くから、早く寝ないと。室内に繋がる分厚いドアの取っ手は、それほど冷たく感じなかった。

大粒の雪の隙間から見える空は、青と灰色の中間に、朝日のピンクが混ざった、不思議な煙の色をしていた。フェリーを降りた私は、キャリーケースから折り目がだいぶ柔らかくなって毛羽だったメモを取り出す。

ここにあるバス停から、この住所の近くまで行くバスは出るだろうか……。一面に広がる駐車場の隅に、小さく見えるバス停の群れに向かって歩き出したときだった。白が踊り狂う中、やけに黒い髪が目に留まった。一番向こうのバス停。遙か遠くでモッズコートの一

ドを目深に被っていても、覗く黒は目を刺す。その男はこっちに歩いてくる。

「亜美ちゃんか？」

声はだいぶ低くなっていったけど、この濁点混じりの呼び方は間違いなかった。

「陸くん……」

私の眩しが届く距離ではなかった。唇の動きで分かったのか、陸くんは当たり前だけ慣れた様子で雪の中を走ってきた。

「久しぶりだな。元気にしてたか？」

動作のわりに落ち着いた話し方。目の前まで来て、こびりついた雪を払いながらフードを取る。爪の形。絵に描いたような下がり眉に、黒目がちな気の抜ける顔。記憶していた輪郭より、骨格がしっかりしていたけれど、印象は昔のままだった。

「あの……久しぶり陸くん、なんで来てるって……」  
陸くんは感情の読みにくいその顔に、少しの困惑を滲ませた。

「あれ。おめさの母ちゃんから、おらの家に電話あったど。したから迎えに来たしょ。……聞いてねえべか？」

お母さん……。

「なんで、すぐ私だつて分かったの？」

「まだあ。分からねえことねえしょ。亜美ちゃんは昔からなんーも変わってねえもの」

雪にまみれた私を映した黒目がちな瞳が、弧を描く臉の  
あわいで艶々と輝いた。

ああ、この瞳だ。ずっと私を真っ直ぐ見てくれていた  
のに、私が合わせることのなかった、感情豊かな優しい  
目。

陸くんは変わっていなかった。私と同じく、しかし私  
とは真逆の意味をもって。

「ごめん……。ごめんね、陸くん。ごめんなさい」  
私は変わらない。

「なに？ ……亜美ちゃん。なした？」

目を伏せて泣く私に、陸くんはいよいよ慌てて、「まづ、  
まづ行くべ。おらの母ちゃん、張り切ってご馳走さ作っ  
て待ってるぞ」と私にそっと手を差し出した。

丸い爪には覚えがあるけれど、指や手の甲は、大人の  
男のそれになっていた。しかしなぜか、その手を取るの  
に抵抗はなかった。

「うん」

「やいーやいや……。こっちは雪でわやだしよ。足元、気  
いっけれ」

「うん」

陸くんは手綱のように私の手を引き、向かってきたとき  
より遙かにゆっくりと歩き始めた。

小学二年生の秋、学校行事としてあった遠足。その行

き先だった牧場で、私は、馬と牛のどっちが好きかとい  
う話を、誰かとしたことがあった。